



調査区全景（北西より）



南大門基壇の版築層（南から）



SX9361 出土鎮壇具容器（須恵器広口壺）内の銭貨

# 序

平成22年（2010）は興福寺創建1300年という記念すべき年にあたり、懸案の中金堂再建工事も今秋、立柱式を予定している。

この中金堂の設計に当たっては、平成12、13年度に行われた基壇発掘調査の成果によるところが大きい。その調査を担当されたのが奈良文化財研究所で、今年度の南大門の基壇調査も担当していただくことになった。

調査は3ヶ月の予定ではじめられたが難航し、倍の6ヶ月にも及んだ。その結果、南大門は南方へと大きく傾斜した谷に大量の土を盛って造成したこと、規模は『興福寺流記』などの古記録と一致すること、地覆石などの凝灰岩は春日地獄谷の石を用いたこと、門の左右に安置されていた仁王像の位置が確認されたこと、基壇のほぼ中央から奈良時代の鎮壇具と思われる須恵器が出土し、中に和同開珎やガラス小玉、さらには種子や魚の頭部が納入されていたことなど、学術的に貴重な成果を得ることができた。

本概報は、「第1期興福寺境内整備事業にともなう発掘調査概報」の第5冊目として、その成果を公にするものである。

平成22年3月

興福寺貫首 多川俊映

## 目 次

序	
目 次	
1 調査経過	3
2 南大門の歴史	4
(1) 興福寺創建と南大門	4
(2) 平安期～近代の南大門	4
(3) 南大門の年中行事	5
(4) 南大門の建築	6
3 遺 構	7
(1) 造営前の地形と整地	7
(2) 南大門	8
(3) その他の遺構	19
(4) 近代の削平と修築	19
4 出土遺物	20
(1) 瓦磚類	20
(2) 土 器	22
(3) 金属製品・錢貨	23
(4) SX9361出土鎮壇具容器の内容物	24
5 自然科学的分析	26
(1) 鎮壇具容器内の有機物	26
(2) 鎮壇具容器内の魚類遺存体	27
(3) <sup>14</sup> C年代測定結果	28
6 結 語	31
報告書抄録	32

## 例 言

1. 本書は興福寺境内第1期整備事業にともなう平成21年度発掘調査概要報告書である。
2. 調査は興福寺の委託を受けた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部（平城地区）が、平成21年7月13日から12月22日にかけて実施した。
3. 調査は、箱崎和久・馬場 基・森川 実・芝 康次郎・森先一貴が担当し、韓 志晩（東京大学大学院）・三岡由佳（名古屋大学大学院）・宮原敦子（同志社大学）が参加した。
4. 調査にあたっては、文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の協力を得た。
5. 本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第458次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準にしたがい一連の番号を付した。発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第VI系）による。
6. 本書の作成は、当調査部長・井上和人の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議を経ておこなった。編集は森川 実が担当し、各項は執筆を分担した。なお、5（1）は金原正明氏（奈良教育大学）に執筆を依頼し、5（2）は当研究所研究員の山崎 健が執筆した。
7. 遺構・遺物の写真は、牛嶋 茂・中村一郎・杉本和樹が撮影した。

## 1 調査経過

今回の調査は、興福寺南大門の全面的な発掘調査である。

興福寺第1期境内整備事業にともない、奈良文化財研究所は興福寺中金堂院の発掘調査を順次おこなってきた。1998年度に中門（841.5m<sup>2</sup>）、1999年度に東面回廊の北半と中金堂前庭部（1485m<sup>2</sup>）、2000～2001年度に中金堂と北面回廊の一部（1836m<sup>2</sup>）、2002年度に東面回廊・南面回廊の調査（981m<sup>2</sup>）を実施し、2004年度には南面回廊の一部を調査している。これらの調査からは数年を隔てるが、今回の調査もこの境内整備事業の一環であり、中金堂院とその周辺における発掘調査の掉尾を飾るものである。なお、南大門の周辺では、1976年に防災設備設置工事にともなう部分的調査がおこなわれており、南大門の東西で基壇建物2棟、南大門の南側で礫敷および石組溝が見つかっている。

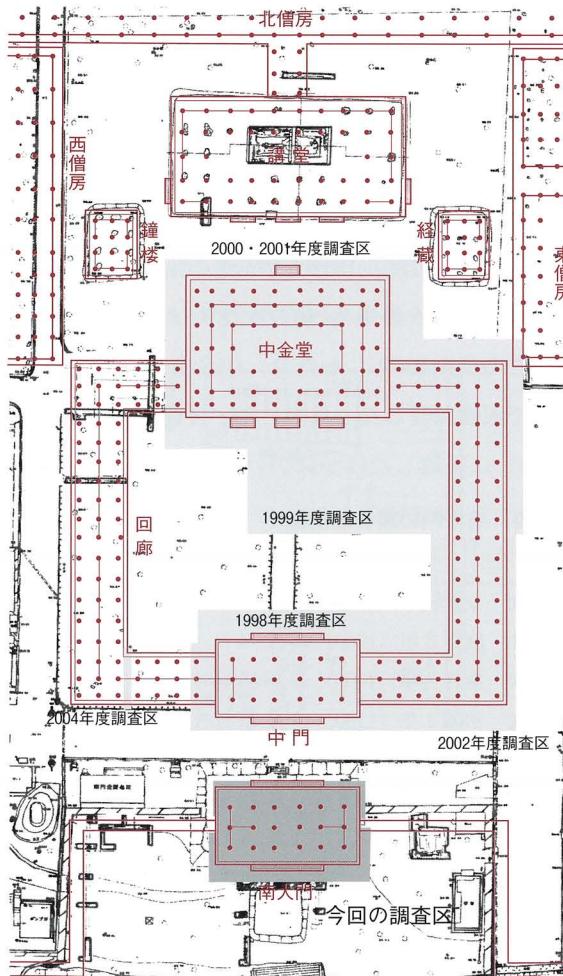
発掘調査以前の南大門跡は芝生で覆われた土壇で、その上には花崗岩の石敷があった。石敷の表面には沢瀉など数種の刻印があり、過去に調査例がある（岡田保造編『興福寺南大門跡一石敷刻印調査報告一』大阪成蹊女子短期大学一般教育研究室、1986）。寛政3年（1791）刊行の『大和名所図会』には、南大門における「をもだか」の刻印についての記事があり、石敷が近世にさかのぼる可能性があった。このため、石敷については興福寺が記録作成ののち、2009年7月上旬に撤去した。

発掘調査は2009年7月13日に始まり、同年12月22日に終了した。調査面積は774m<sup>2</sup>である。今回の調査により、南大門の基壇規模・建物規模や基壇外装の変遷、南大門造営以前の地形や基壇の築造工程などが明らかとなった。また、同年11月には基壇中央で鎮壇具の発見があった。

（森川 実）

第1表 調査経過

7月1日	調査区設定・レベル移動。
7月6日	南大門土壇上の石敷撤去開始。
7月13日	人力による表土除去開始。基壇土見えはじめめる。
7月29日	金剛力士像台石SX9364を検出。
7月30日	南大門の基壇周りに盛土（茶褐色土）ありと判明。
8月3日	瓦廃棄土坑SK9426を掘り下げ。
8月18日	基壇北東部に重機を投入し茶褐色土を除去。
9月3日	基壇南東隅にて地覆石および雨落溝を確認。
9月14日	基壇東南部で雨落溝SD9387を検出。
9月24日	記者発表。
9月27日	現地説明会。聴衆2,265名と多く、過去最高の人出。
9月28日	調査区南東部で灰褐色土を掘り下げ、SX9420検出。
10月9日	東築地壠の南側でSD9386を検出。
10月14日	クレーンによる空中測量。
10月15日	全景写真および細部写真的撮影。
10月19日	実測作業開始（～10月30日まで）。
11月4日	鎮壇具埋納穴SX9361検出。
11月6日	鎮壇具取り上げ。同日中にX線撮影を実施。
11月18日	基壇断割で掘込地業の北端を確認。
11月26日	中央断割南端で基盤層を確認。
12月10日	鎮壇具の発見・断割調査の成果について記者発表。
12月14日	中央断割西壁にて土層剥ぎ取り（～12月15日）。
12月16日	中央断割ようやく埋め戻し開始。
12月22日	断割埋まる。砂撒きののちシートで覆う。



第1図 発掘調査位置図（1：1500）

## 2 南大門の歴史

### (1) 興福寺創建と南大門

南大門の造営時期は史料に明徴を欠き、上限を明らかにしえないが、その下限は『興福寺流記』(以下、『流記』)にうかがえる。『流記』が引用する奈良時代の資財帳「天平記」は、南大門の規模を「間別一丈五尺。廣二丈八尺」とし、南大門の獅子像および金剛力士像については「内左右師子形。總金色。外左右金剛力士。總綠色。」と述べる。また、「門守屋二間。在門外左右云々。東西在曲殿。各有脇門云々。」と記し、門前に守屋や曲殿があったことを伝えている。つまり、「天平記」が記された時点で、南大門はすでに完成していたのが明らかである。

瀧谷和貴子は、『流記』が引用する「天平記」の成立を天平2年(730)をあまり下らない頃とする(瀧谷和貴子「『興福寺流記』について」『佛教藝術』160、1985)。この説に信をおく場合、南大門の完成は天平2年が一応の下限となろう。一方、毛利久は『流記』が伝える「天平記」・「天平十六年記」などを同一視し、回廊・南大門の下限を天平16年(744)とするが、実際には中金堂とほぼ同時の完成を考えている(毛利久「興福寺伽藍の成立と造像」『佛教藝術』40、1959)。中金堂に安置された弥勒淨土群像は養老5年(721)8月の作で、このときが中金堂完成の下限である。南大門の完成は中金堂の完成にやや遅れたであろう。

### (2) 平安期～近代の南大門

『春日社寺曼荼羅図』(室町時代末)などにみえるように、興福寺南大門は壇正積基壇の上に建つ5間幅の重層建物で、中央3間分が通路であったことが知られている。通路の左右には金剛力士像が南面して立ち、『興福寺曼荼羅図』(平安時代末～鎌倉時代初頭)がその像容を詳しく伝えている。このように、興福寺の正門として偉観を誇った南大門であるが、中金堂・回廊・中門などと時を同じくして七度火災に遭い、六度再建された歴史をもっている。南大門の罹災と再建は次のごとくである(第2表)。南大門の第1次～第3次焼失は11世紀中頃～後半のことで、火災のたびにすぐ再建をおこなっている。しかし治承4年(1180)12月、平重衡の南都焼き討ちにより、興福寺は東大寺とともに未曾有の災厄に見舞われた(第4次焼失)。第5次焼失は建治3年(1277)7月、第6次焼失は嘉暦2年(1327)3月である。この後約400年にわたり、中金堂院と南大門とは火災を免れていたが、享保2年(1717)の第7次焼失で灰燼に帰した。以来、堂宇再建は進まず、南円堂が寛政9年(1797)に、中金堂仮堂が文政2年(1819)に再興したほかはついに再建されなかった。寛政3年(1791)刊『大和名所図会』は、建物をう

第2表 南大門の焼失と再建

焼失		再建	
第1次	永承元年(1046)12月24日	①	第1次 永承2年(1047)7月18日(南大門ほか上棟)
第2次	康平3年(1060)5月4日	③	第2次 治暦3年(1067)2月25日(興福寺供養)
第3次	嘉保3年(1096)9月25日	④	第3次 永長2年(1097)2月11日(諸堂上棟)
第4次	治承4年(1180)12月28日	⑤	第4次 文治3年(1187)7月13日(南大門上棟)
第5次	建治3年(1277)7月26日	⑦	第5次 弘安2年(1279)10月26日(金堂ほか上棟)
第6次	嘉暦2年(1327)3月12日	⑨	第6次 正平4年(1349)10月27日(南大門上棟)
第7次	享保2年(1717)1月4日	⑪	—

①『興福寺流記』 ②『造興福寺記』 ③『康平記』ほか ④『中右記』ほか ⑤『玉葉』・『山槐記』 ⑥『春日神社文書』 ⑦『中臣祐賢記』 ⑧『勘仲記』  
⑨『法隆寺別当次第』 ⑩『興福寺文書』 ⑪『塙尻』

しなった壇正積基壇の上に、簡素な釘貫門と築地塀とを描く。

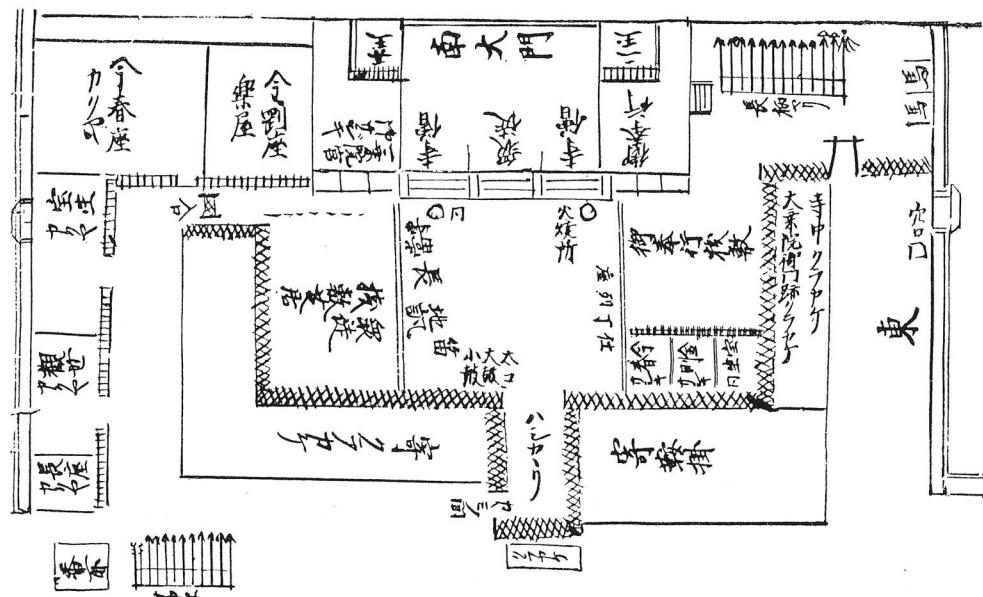
享保の焼失以来、南大門を含む伽藍の再興が幕末まで企図されていたことからみて、その基壇が大きく改変を蒙るのは明治期の廃仏毀釈以降と考えねばならない。明治4年（1871）の寺領没収、翌5年の廢寺確定ののち、寺内の堂宇・土塀が取り壊され、興福寺は大いに荒れた。明治6年には、時の県令・四条隆平が南大門の基壇上に遙拝所を設置したが、その撤去が奈良県から許可されたのは明治21年（1888）4月のことである。このとき、興福寺は還仏会を執行し、寺の復興がようやく実現している。興福寺はその後「境内地に築地塀をめぐらす計画を立て、その土取りには境内地のほか東金堂東手の丘を切り崩すこととして出願許可された」という（奈良公園史編集委員会編『奈良公園史』奈良県、1982）。発掘調査で判明したように、南大門の基壇は近代に大きく削られており、それとの関連が想起される。なお、南大門の東西に現存する築地塀は明治27年に寺域画定のため興福寺が築いたものである（藪中五百樹「明治時代に於ける興福寺と什宝」『立命館大学考古学論集』Ⅲ、2003）。

### (3) 南大門の年中行事

南大門前の広場は、興福寺にかかる芸能や宗教的催事の場として有名である。門前での神事芸能には薪御能があり、春日若宮御祭も門前を「衆徒蜂起」・「南大門交名」の場として用いる。このほか、今は途絶えたが近世までは心経会があった。ここでは村井古道（1681～1750）著『南都年中行事』を中心に、南大門とその門前における薪御能の空間利用をみてみよう（第2図）。

薪御能のはじまりは、東西金堂でおこなった修二会の呪師猿楽である。修二会は国家安全・五穀豊穰・払除厄災を祈る法会で、呪師猿楽はその祈りを芸能として表現したものという。その後、呪師猿楽は修二会との分離が進み、室町期に薪猿楽（薪御能）となった（安田次郎『寺社と芸能の中世』山川出版社、2009）。本来は旧暦2月の行事であったが、一度の廃絶を経て、今は5月の行事である。

薪御能の舞台は、南大門の南側にある「般若芝」である。第2図によれば、寺僧・衆徒は三間幅の南階段を上がったところに、奉行および一乗院宮は金剛力士像の前に着座し、基壇の上から能を観賞したことがうかがえる。また、舞台の東側には奉行の桟敷、西側には衆徒の桟敷を仮設し、その背後には金剛・金春・宝生・觀世の4座が楽屋を設けていた。こうした情景は、『大和名所図会』などにも描かれており、薪御能が南大門とその門前とをほぼ占拠する一大行事であったことがわかる。（森川 実）



第2図 薦御能舞台見取り図（『南都年中行事』より）

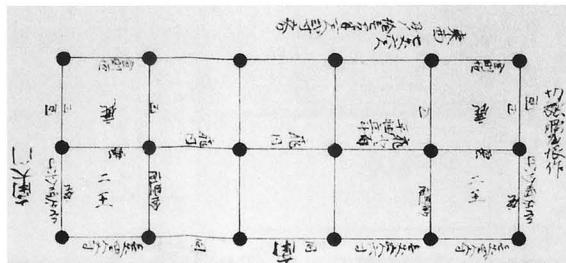
#### (4) 南大門の建築

創建期の南大門については『流記』に記述がある。「南大門一宇 五間、中三間有戸、間別一丈五尺、広二丈八尺、天平記延暦記并同之、宝字記云、長七丈八尺、広三尺、加端皆用裁金銅云云、天平記云、金泥裁銅云云、内左右師子形、総金色、外左右金剛力士、宝字記云、左右侍立石、分別内外矣、又云狹門二口云云、天平記云、門守屋二間、在門外左右云云、東西在曲殿、各有脇門云云、延暦記云、東西側在曲殿云云」。すなわち桁行5間で中央3間に扉がつき、柱間寸法に関しては天平記・延暦記と宝字記では齟齬がある。また天平記によると、門扉内の左右には金色の獅子が、門扉外の左右には金剛力士が安置されていた。門外の左右には門守屋のほか曲殿があった。柱間寸法に関しては、大岡實による解釈があり、記載が中門と類似することから、桁行中央3間が16尺、両端間が15尺、梁行14尺で、中門と同規模と想定されていた（『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966年、50頁）。

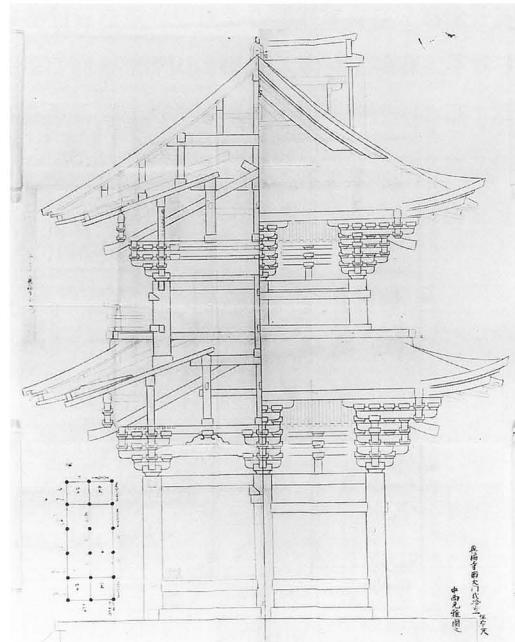
1998年におこなった中門の発掘調査では、上記の通りの遺構を確認することができ、大岡の推定を裏づけた（『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報 I』興福寺1999年）。しかし、南大門に関しては疑問が残る。すなわち大岡も古絵図類から中門は単層切妻造、南大門は重層入母屋造と想定しているが（『南都七大寺の研究』288～289頁）、重層建築の場合、桁行両端間と梁行の柱間寸法を等しくするのが常套だからである。したがって宝字記の「広三尺」を「広三丈」の誤記と解釈すれば、梁行が15尺等間で、桁行は中門と同じく中央3間が16尺、両端間が15尺と考えられる。

いっぽう享保焼失以前の実測図である『興福寺建築諸図』(東京国立博物館蔵)には、中金堂院の平面図に南大門も描かれ(第3図は南大門部分のみ)、また南大門の建地割図(立断面図、第4図)も残る。建地割図にも小さく平面図を載せるが、それらによると南大門の平面は桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行中央3間が「壱丈五尺五寸」、桁行両端間と梁行が「壱丈四尺五寸」とあり、第3図には桁行総長(「東西」)は「七丈六尺」の書き込みがある。中央3間の棟通りには「扉北ニ開」とあり、両端間の門扉外側には「二王」、門扉内側には「獅子」の記載があり(第3図では「鹿」と書く。第4図の平面図では「獅子」)、創建期の安置形態が近世まで維持されていたと推定される。中央3間の扉は「北開」。また建地割図からは応永再興時の南大門の構造が判明する。重層入母屋造の建築で上下層とも三手先組物だが、古代の形式と異なり、応永年間に再興された現存する東金堂や五重塔などとも違って特異である。二重の柱は初重の垂木上に置いた柱盤上に立つ伝統的な形式。中世の二重門は現存遺構もなく、その点でも貴重な資料である。

(箱崎和久)



第3図 『興福寺建築諸図』所収の南大門平面図



第4図 『興福寺建築諸図』所収の南大門建地割図

### 3 遺構

#### (1) 造営前の地形と整地

南大門の発掘調査で確認した基盤層は、硬く締まった黄褐色～赤褐色の礫層である。この礫層はクサリ礫からなり、興福寺が立地する丘陵を構成している。

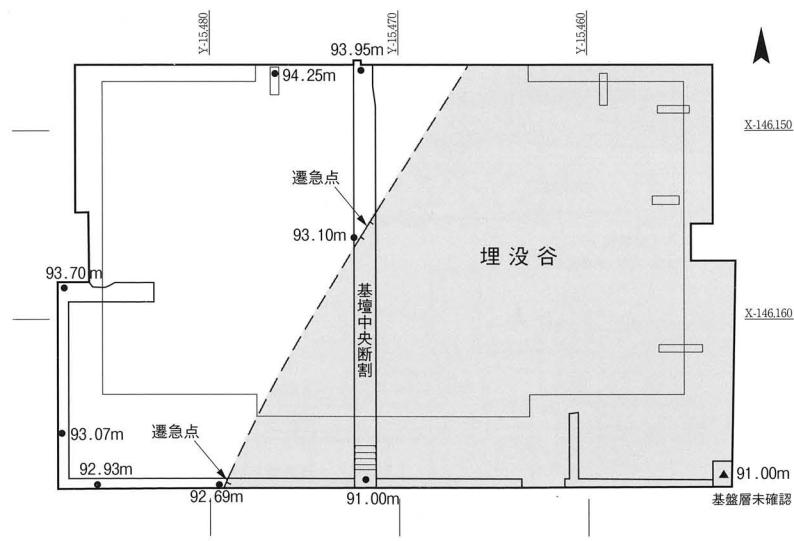
基盤層が最も高いのは調査区西北部で、その上面は標高約94.0mである。一方、東南隅では地表面から3.0m（標高91.0m）まで掘り下げても基盤層を確認できなかった。調査区西北部と東南隅との基盤層比高は実に3.0m以上で、実際はこれを大きく上回るであろう。つまり、南大門の東半には谷があったことがわかる（第5図）。

調査区南壁の土層観察では、Y-17,479付近に基盤層の傾斜変換点（遷急点）があり、これより東側が谷の西斜面である。同様に、中央断割ではX-145,155付近で基盤層の傾斜が変わる。この2点を谷の西端とみるならば、谷の主軸はおおむね北東～南西方向と割り出せる。すぐ北側の中門（1998年度）や東面回廊（2002年度）でも、基壇造営前に埋め立てた谷を確認している。中門では基壇の東半分で谷を埋めており、南大門とは造営前の地形が似ている。このことから、回廊・中門と南大門の基壇下にある谷は一連である可能性が高い。

南大門の基壇は、上述の開析谷を厚い整地層で埋め、平坦地を造成したうえで築成している。整地層は造営前の地形に応じ、北側・西側で薄く南側・東側で厚い。その層相にもとづき、下位から整地層①・同②と区別する。

整地層①は締まりの悪い土層で、基盤層由来の粘土塊が多く、遺物を含まない。粘土塊を多く含む橙色土と、これを含まない黄褐色土とが互層をなしているが、いずれも南（または東）へと傾斜している。その堆積状況から、谷を埋めるべく一気に積まれたとみえる。中央断割の南端部で、その厚さは約1.6mにおよび、これより東側でさらにその厚さを増すのが確実である。

整地層①によって谷を埋めたのち、その上には整地層②をさらに重ねる。整地層②はやや粘性のある均質な黄色土で、瓦片・土器片を含む。中央断割南端部での厚さは最大で約90cmである。その分布は調査区全域におよび、調査区の西端では基盤層を直接覆っている。その上面の標高は調査区北辺で94.4m、



第5図 基盤層標高 (1 : 400)

同南辺で93.5mであり、南側がなお90cm低い。

## (2) 南大門

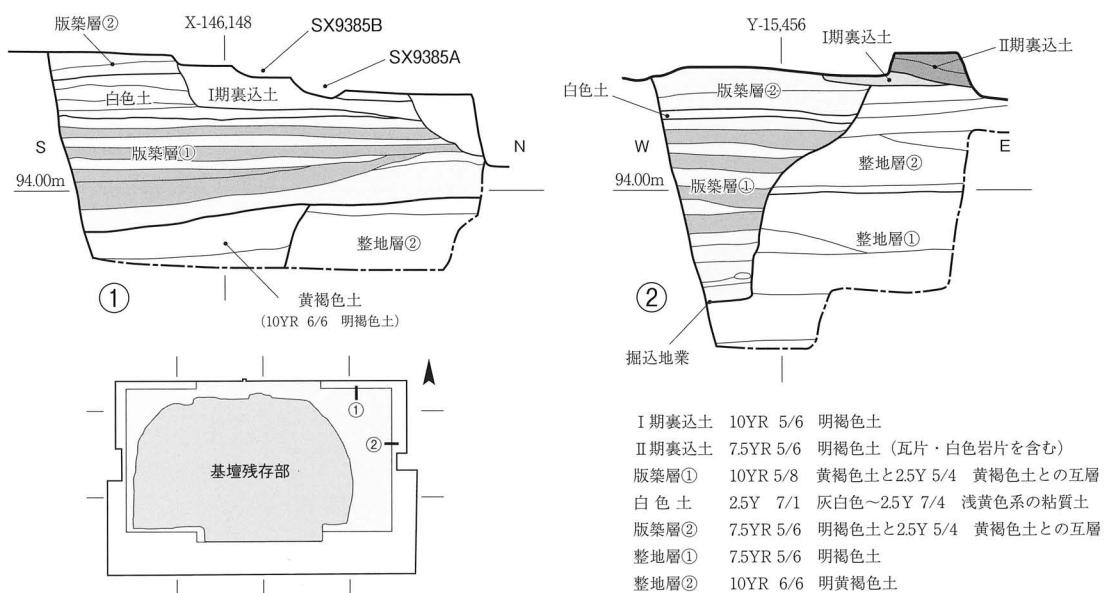
**南大門SB9360** 南大門SB9360は桁行5間×梁行2間の東西棟で、東西23.1m(78.0尺)、南北8.9m(30.0尺)に復元できる。柱間の寸法は、桁行の中央3間が4.7m(16.0尺)等間、両端の1間は4.5m(15.0尺)で、梁行は4.5m(15.0尺)等間である。中央の3間は門の通路にあたり、その幅は14.2m(48.0尺)である。『流記』では、門の規模を「天平記」・「延暦記」に基づき「間別一丈五尺。廣二丈八尺」、「寶字記」を引いて「長七丈八尺。廣三尺。加レ端。」と記す。「天平記」・「延暦記」の記事では、桁行は15尺等間、梁行は14尺等間となり、調査の結果判明した南大門の規模とは少し異なる。一方、「寶字記」の「廣三尺」が広三丈(30.0尺)の誤りとすれば、この数字は梁間総長の実測値に一致する。

### ①基壇

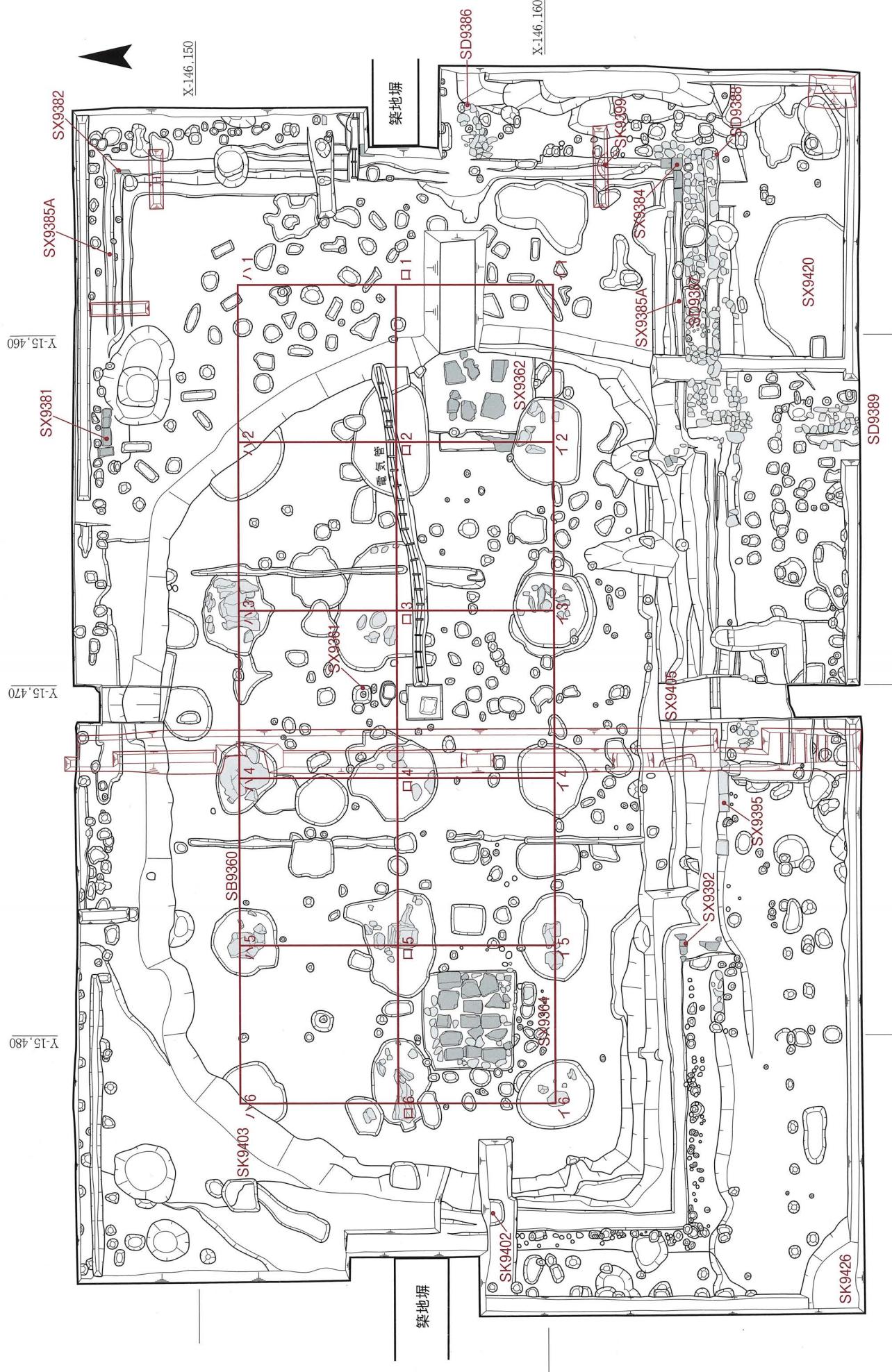
南大門の基壇幅は東南隅の地覆石SX9384の東辺外縁と、西端の地覆石抜取痕SX9385との距離から、東西30.8m(104.0尺)である。また、基壇の長さは北辺の地覆石SX9381と、東南隅の地覆石SX9384との距離から、南北16.6m(56.0尺)となる(地覆石およびその抜取痕は後述)。基壇心の座標は、X-146,155.7、Y-15,470.2である。

基壇の上面は表層約10cmが土壤で覆われ、礎石や金剛力士の台石は完全に埋没していた。礎石は上部が碎かれ、本来の高さをとどめない。また、礎石ハ4(後述)を支える根石が遺構検出面に露出し、その標高は95.53mである。根石の露出から考えて、基壇の上面は削平を受けたとわかる。基壇上の遺構検出面は標高94.35～94.50mである。

南大門では基壇造成に先立ち、掘込地業をおこなっている。その規模は基壇のそれよりやや小さく、東西28.0m、南北15.2mである。このため、掘込地業の輪郭を平面で検出できたのは西北隅の一部で、北端・南端および東端は断割調査で確認したのみである(第6図)。中央断割西壁の土層観察によると、掘込地業は整地層②の上面からで、その深さは約50cmである(第8図)。南下がりの地形にしたがい、掘込地業の底面も南へと傾斜している。



第6図 掘込地業北端・東端断面図(1:30)



第7図 遺構平面図 (1:150)

南大門の基壇土は4つの単位からなる。すなわち、下位から黄褐色土（厚さ約50cm）、版築層①（厚さ約110cm）、白色土（厚さ約20cm）、版築層②（厚さ約55cm）である。この層位的関係はどの場所でも同じで、版築層①および白色土の上面は版築過程の同一段階を示す。礎石の据付レベルは、後述のように版築層②の中位である。

おもに中央断面の断面観察から、基壇の築成過程は次のように復元できる。まず、掘込地業を黄褐色土で埋めるが、その厚さは一定せず、基壇中央部で厚く周辺部で薄い。このため、基壇東端付近では掘込地業が埋まっている。黄褐色土は拳大未満の礫を混じ、わずかながら瓦片を含んでいる。出土した軒平瓦片は6671Eに属する。

次いで橙色土と灰色土とを交互に積み重ね、高さ約1.1mの土壇を築く。橙色土・灰色土はいずれも厚さ5cm程度で、最大で20層を重ねている（版築層①）。橙色土は粘土塊を多く含み、灰色土はやや軟質で砂質分に富む。したがって、両者の区別は容易である。橙色土と灰色土とはほぼ水平に重なっているが、基壇の外側に向かうにつれ各層ともに薄くなり、または途切れがちになる。このため、版築層①の上面は基壇中心部が高いマウンド状を呈していたよう、ことに基壇南部での高低差が大きい。

版築層①からなる土壇の上には、厚さ約20cmの白色土を敷く。この土層は白色粘土塊を多く含み、上下の版築層とは明瞭に区別できる。その上面はやはりマウンド状を呈するが、南階段付近には暗褐色系の土を足して土壇上の平坦面を拡張している。

その後、白色土の上位に黄橙色土・灰色土の互層（版築層②）を重ね、その途中で礎石を据える。各層は厚さ5cm程度である。黄橙色土と灰色土との違いは版築層①の互層ほど明瞭でなく、わずかな明度差で区別できる程度である。基壇上面は削平により失われているが、版築層②を積んで基壇の築成を終えたとみられる。

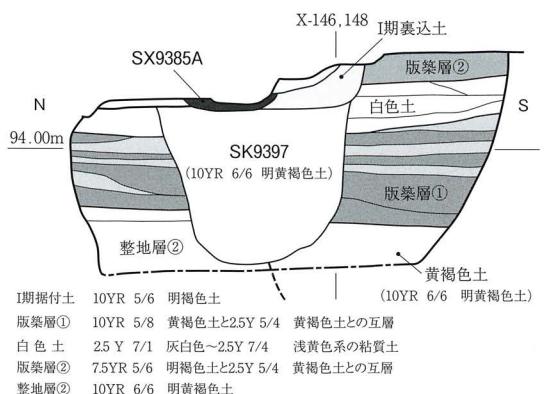
**礎石とその抜取穴** 基壇上では礎石とその抜取穴を15基検出した。記載の便宜上、東南隅の柱を基点とし、南から北へイ・ロ・ハ、東から西へ1～6と番付を与える。東端の柱列（イ1・ロ1・ハ1）は削平のため消滅している。礎石がよく残るのはハ3～ハ5の計3基で、すべて花崗岩である（第10図）。

いずれも礎石上半は碎かれており、全形をとどめないが、据え替えの形跡はなく、創建期のものである。残余の礎石はほぼ完全に抜き取られるか、その一部を残すのみである。

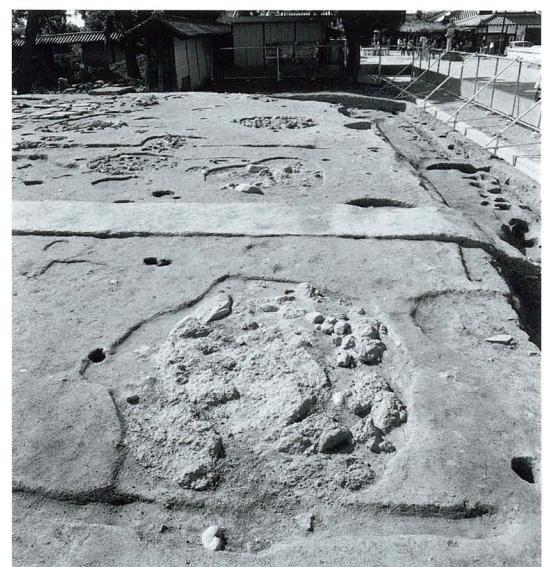
断面調査により、礎石ハ4は版築層②を積み上げる過程で据え付けていることが判明した。白色土の約15cm上位、標高約95.2m付近に根石を据え、礎石とその根石（三笠安山岩の巨礫）の周囲を橙色粘質土で固める。橙色粘質土は礎石ハ4の周辺が最も厚い（層厚約20cm）。礎石の据え付け後は黄褐色（Hue 2.5Y 5/4）系の版築層をさらに重ね、礎石の下半を埋めている。礎石据付穴は確認できない。

礎石イ4・ロ4・ハ2・ハ6はすでに失われているが、これらを支えたのも橙色粘質土である。礎石ハ4と同様に、橙色粘質土は白色土の約15～20cm上位にあり、層厚は最大で25cm。やはり礎石抜取穴の周辺にのみ分布する。橙色粘質土の下面は抜取穴イ4・ロ4・ハ6の近くで標高95.2m、同ハ2では95.0mで、その高さはおおむね一致している。橙色土は版築層のなかでの層位を同じくし、その下面是礎石据え付け直前の版築層上面を示すとみられる。

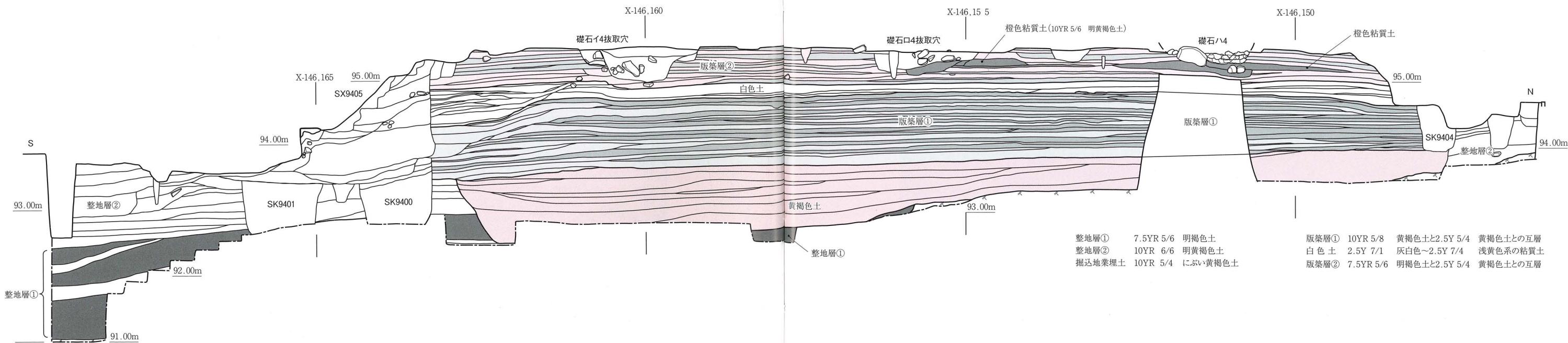
礎石抜取穴は不整形プランをもち、長径約2.2～3.5m。礎石ハ2・ハ6の抜取穴は遺構検出面から



第9図 SK9397断面図 (1 : 30)



第10図 級石ハ列 (東から)



第8図 基壇断面図 (1 : 60)

約90cmの深さがある。埋土は灰褐色土で、抜取時に破碎した花崗岩片や、もとは根石とみられる巨礫を含む。この2基は基壇削平時に基壇土もろとも削りとられ、近代の盛土（茶褐色土）によって覆われている。

**南階段SX9405** 版築層の南辺を垂直に切り土したのち、新たに土を積んで南階段を造っている。階段の積土は瓦片・凝灰岩片や木炭を多く含み、基壇本体の版築層とは明らかに土質が異なる。階段の幅は門の通路幅（14.3m）に等しい。階段の出はわずかに残った踏石（花崗岩）を最下段とみる場合、基壇南端から約1.2mとなる。積土中から採取した木炭は、7世紀後半～8世紀初頭にかけての<sup>14</sup>C年代（測定番号IAAA-92542）を示す。

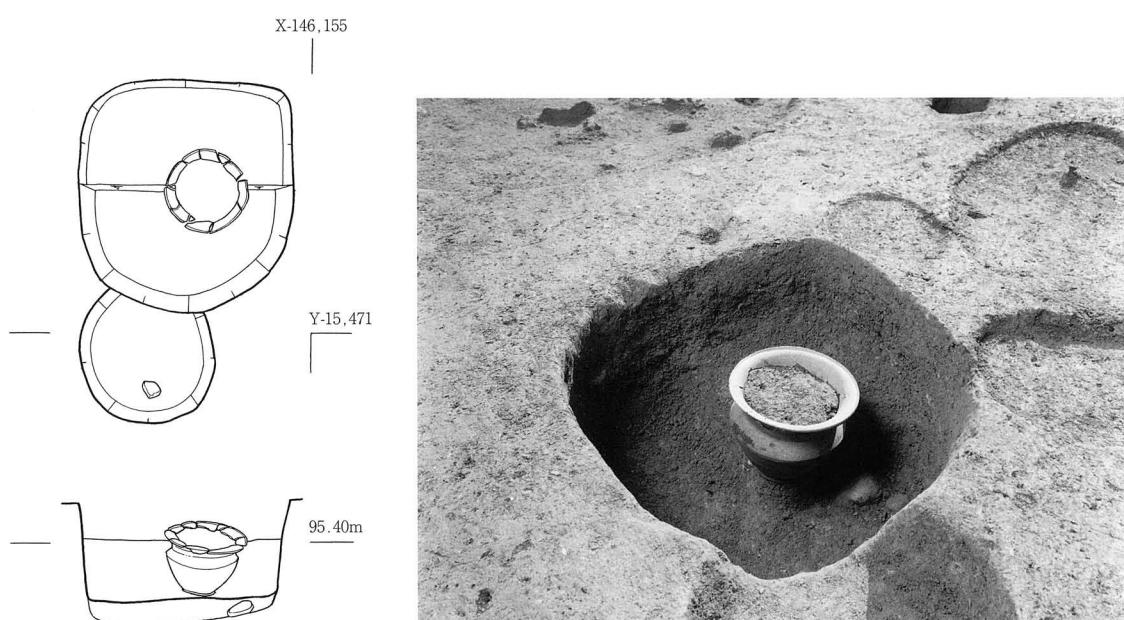
**土坑SK9397・SK9398・SK9399** 基壇北辺～東辺の断割調査で確認した土坑。SK9397は基壇土（版築層①・白色土）を壊し、凝灰岩Bの地覆石据付土に覆われる（第9図）。SK9398・SK9399は掘込地業の東端付近に位置する。

**土坑SK9400・SK9401** 南階段SX9405の下位にある土坑。中央断割西壁と、同断割の底面で検出した。いずれも整地層①まで掘り下げており、SK9400は版築層①を壊している。SK9400は一辺110cm、SK9401は一辺120cmの掘形をもつ。両者はその中心で1.8mを隔て、互いに関連する土坑とみられる。

**土坑SK9402・SK9403** 基壇西辺の断割調査で確認した土坑（第20図）。SK9402は凝灰岩Bの地覆石抜取痕跡の直下にある。版築層①を壊すが版築層②に覆われ、基壇築成の途中で掘削した穴である。SK9403は基壇土が残らないため平面検出できたもので、掘込地業の西端部にある。

**土坑SK9404** 中央断割西壁の北端付近で検出した土坑で、掘込地業の北端に位置し、版築層①を壊している。

土坑SK9397～9405は断割調査で確認したものが多く、これらが並ぶ状況を平面で確認したわけではない。しかし、これらの土坑は掘込地業の北端・東西端と南端付近に位置し、SK9397・SK9402が地獄谷溶結凝灰岩（『概報』IIにならい、以下「凝灰岩B」）の地覆石据付土の下位にあるなど共通点が多く、基壇築造段階における一連の柱穴であろう。その性格は明らかでないが、本書では南大門造営時の足場穴と考えたい。なお、類例には平城宮第2次大極殿SB9150を二重に囲む棧敷遺構SX9148がある（『平城



第11図 SX9361平面・断面図（1：20）

第12図 鎮壇具容器（須恵器広口壺）埋納状況（北西から）

宮発掘調査報告』X IV)。SX9148の柱穴は一辺60~90cmの方形掘形をもち、内側の柱穴が大極殿の地覆石据付掘形に重なる。SX9148との比較でいえば、今回発見のSK9397~9400・SK9402~9404が内側の柱穴、SK9401が外側の柱穴といえるかもしれない。

## ②基壇上の遺構

**鎮壇具埋納遺構SX9361** 基壇のほぼ中心部に位置し、一辺約60cmの隅丸方形を呈する(第11図)。この穴は中金堂院の中軸線上にあり、南大門の棟通り(基壇心)から北へ約90cmの位置を占める。検出面からの深さは50cm。埋土は黄褐色粘質土で、色調は基壇土のそれに近い。焼土、土器片・瓦片などは一切含まない。埋納穴の中心部からは須恵器広口壺(壺Q)が正位で出土した(第12図)。その出土状況から、本遺構は鎮壇具埋納遺構とみられたので、須恵器広口壺についてX線写真・高エネルギーX線CT写真を撮影したところ、壺の内部には和同開珎5枚、ガラス小玉13点が納入されていることが判明した。埋納穴の埋土はすべて採取し水洗篩別をおこなったが、鎮壇にかかる遺物は皆無であった。

**金剛力士像(阿形像)基礎SX9362** 三間幅の通路の東側、棟通り柱筋の南側にあり、柱イ1・ロ1(ともに削平)およびイ2・ロ2に囲まれる(第13図)。吽形像の基礎SX9364とは中軸線を介して対称の位置を占める。据付穴は南北3.3m、東西2.5m以上である。据付穴の深さは台石の上面から約45cmで、埋土は褐色土。土器片・瓦片および焼土・木炭を含む。吽形像基礎と同じく、据付穴に凝灰岩Bの切石を敷き並べたものとみえるが、東半は近代に削平を受け遺存しない。また、台石も多くは失われ、わずかに6石を残すのみである。台石上面の高さは標高95.44~95.50mである。なお、据付穴の西側に残る凝灰岩は、金剛柵地覆石の可能性がある。

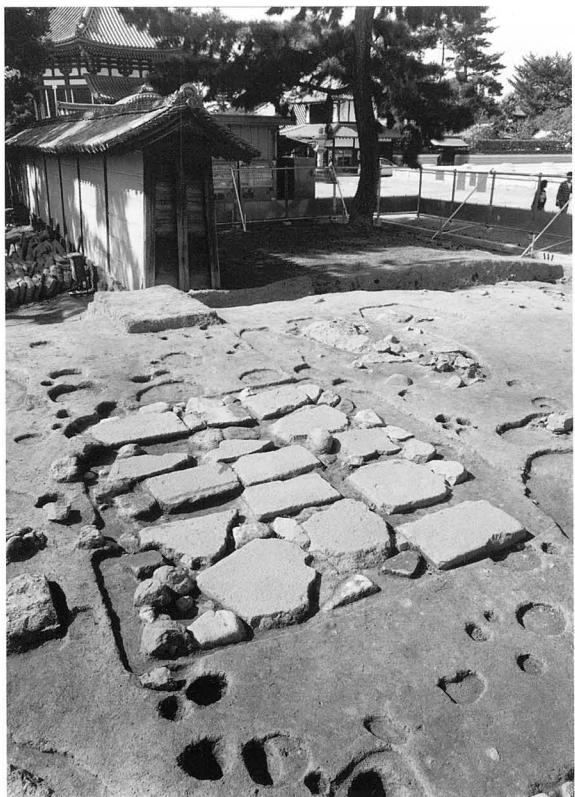
**金剛力士像(吽形像)基礎SX9364** 三間幅の通路の西側、棟通り柱筋の南側に位置し、柱イ5・ロ5およびイ6・ロ6に囲まれる(第16図)。据付穴は一辺約2.8mの隅丸方形で、その内側に凝灰岩Bの切



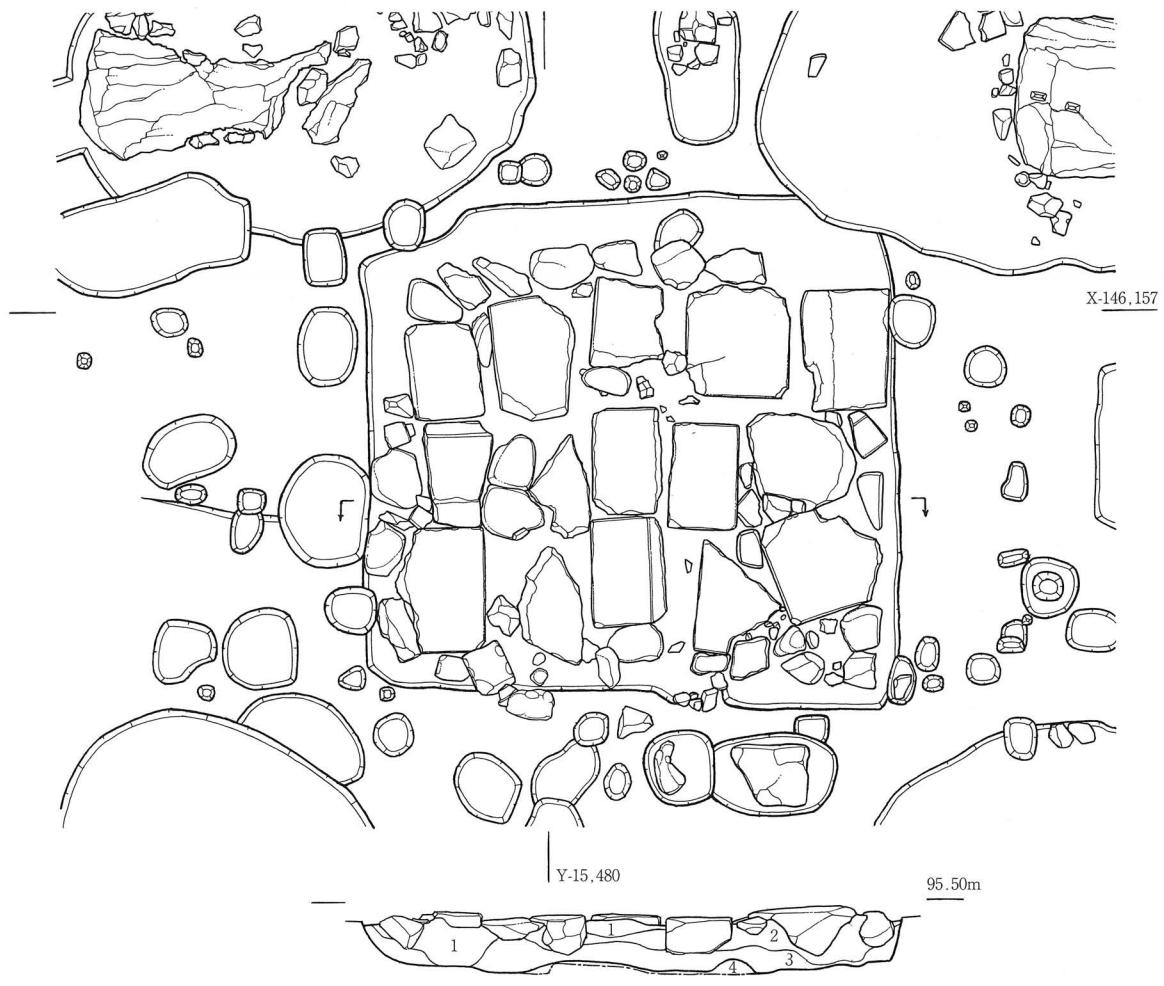
第13図 SX9362 (北東から)



第14図 SX9364据付状況 (南から)



第15図 SX9364 (南東から)



第16図 SX9364平面・断面図 (1 : 40)

石を敷き並べて金剛力士像の台石とし、その隙間は二上山産とみられる凝灰岩（『興福寺－第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』興福寺、2000の「凝灰岩A」）の岩塊や安山岩礫・チャート礫で埋める。台石間には瓦片や焼土・木炭を含む暗褐色土が詰まるが、これは台石の設置後に嵌入した土である。この土から採取した木炭の<sup>14</sup>C年代は、10世紀前半（測定番号IAAA-92604～92606）と12世紀後半～13世紀初頭（IAAA-92608）とに分かれ、後者が第4次再建（1187）時の使用材とみられる。本書では後者の年代を重視し、SX9364が第5次焼失時（1277）にはすでに存在し、第4次再建以前に設置されたと考える。一方、台石の据付土は明褐色～黄褐色土で、瓦片などの夾雜物を含まず、嵌入土とは区別できる。

上の台石は東西2.60m、南北2.05mの範囲を占め、東西に長い。これは力士像が南面していたためであろう。台石上面の高さは標高95.43～95.49mで、SX9362にはほぼ等しい。一方、周囲にある礎石口5・口6の標高は95.52m、イ6のそれは95.58mである。本来の基壇上面はさらに高く、SX9364はこれより低い位置で力士像を支えたことになる。もっとも、台石が載せたのは力士像の岩座であって、台石の上に力士像が直接立ったとは考えがたい。

凝灰岩Bの台石は大きいもので15石を数え、いずれも被熱により赤色化した転用材である。多くは適

当な大きさに打ち割ったもので、打割時のノミ痕とみられるくぼみを残す例もある。その一部は羽目石であったらしく、断面L字形の仕口をもつものがある（第17図1）。断割調査の結果、台石の厚さは多くが約28cmで、その上面のみをほぼ水平に揃えていることが判明した。据付穴の底面には起伏があり、台石上面の高さを調整している。据付穴の深さは、台石の上面から約35cmである。

なお、元禄～宝永年間（1687～1711）に成立したとされる奈良奉行所管内要覧『おほゑ』（奈良県同和問題関係史料センター 1995）には「興福寺南大門間数之覚」という条があり、「二王御長」が一丈七尺五寸・「駒狗長」は七尺八寸と記している。つまり、享保焼失（1717）以前の金剛力士の像高は約5.3mである。

### ③基壇外装と雨落溝

南大門の基壇外装には、凝灰岩Bと花崗岩との2種の石材を確認した。前者は北階段の東側、基壇東北隅、基壇東南隅、南階段の西側などに、後者は南階段の一部に残るのみで、残余はすべて抜き取られている。抜取痕跡は基壇の西北部以外に残り、重複関係などから凝灰岩Bが古く花崗岩が新しい。

**地覆石SX9381・9382・9384・9392** 凝灰岩Bの地覆石で、基壇東北部～東南部にかけて部分的に残る。

**SX9381**（第19図）は北階段の東入隅部の地覆石で、3石がL字形に並ぶ。地覆石は長さ46.0～55.0cm、幅25.0～31.0cm。厚さは15.0cmで、天端の高さは94.59～94.66mである。基壇北辺を縁どる2石は東西に並ぶが、羽目石との接合部付近は破碎されている。西端の1石のみが北折し、北階段の東端をかろうじて教えている。

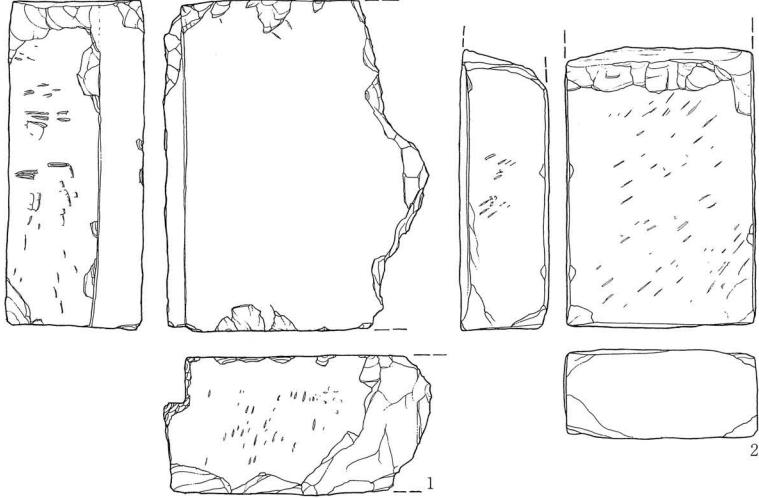
**SX9382**は基壇東北隅の地覆石で、1石分の破片がわずかに残る。本体は周囲の地覆石と同様に抜き取られ、一部が抜取溝の底部に残ったものである。

**SX9384**は基壇東南隅の地覆石で、4石がL字形に並んでいる（第23図）。橙褐色の裏込土が支持し、炭混じりの灰褐色土が覆う。その天端は標高93.13mである。東南隅の地覆石には深さ約1.0cmの仕口があり、隅束をおさめたとみられる。この外側は火熱のためやや赤味を帯びる。

**SX9392**は南階段の西入隅部の地覆石で、2石が残る。長さ42.0cm、幅22.0cmで、厚さは15.0cm。その天端は標高94.31～94.36mである。

**地覆石抜取痕SX9385A** 基壇東北部・東南部で検出した溝状の遺構で、凝灰岩Bの地覆石を抜き取った際の掘り込みである。埋土は灰色で、木炭片・凝灰岩B片を含む。木炭の<sup>14</sup>C年代は17世紀中葉を示し、この頃地覆石を撤去したとみられる。

**石組溝SD9386** 南大門の基壇にとりつく東築地塀の南雨落溝で、防災施設設置工事（1976）で検出し



第17図 SX9364台石実測図（1：15）

た南雨落溝とは一連の遺構である。川原石を2石並べて底石とする。その幅は約55cmで、上面の高さは標高約94.15mである。築地壠の地覆石を北の側石としたようだが、これは遺存しない。南に折れて南大門の雨落溝SD9387へと続くが、残るのはその曲折部のみである。

**石組溝SD9387** 南大門基壇の玉石敷の雨落溝で、基壇の東南端から南階段までの約7.5m分が残る。同時期に存在した地覆石SX9384の外側を縁どり、地覆石の天端からは約10cm下がる。底石は巨礫を2～3石並べたもので、幅約55cm。底石の高さは93.93～94.04mで、西側が低い。

**東西溝SD9388** 雨落溝SD9387のすぐ南側にある東西溝で、その幅は約40cm。長径約40cmの巨礫が落ち込む。巨礫は原位置をとどめず、SD9387の側石を転倒させた溝の可能性がある。

**石組溝SD9389** 南大門の南階段東端から南へと伸びる石組溝。上にみた雨落溝SD9387が南折したもので、1976年の防災施設設置工事でも検出している。東の側石は残存するが、西側のそれは抜き取られて残らない。溝の底石は安山岩などの巨礫で、その幅は約60cm。側石の天端からの深さは約5cmである。なお、今次調査では確認できなかったが、南階段の西端から南へと伸びる石組溝の痕跡が、防災施設設置工事の際に見つかっている。

**南階段踏石SX9395** 南階段の南端部に残る花崗岩の踏石で、南階段の最下段とみる。残存するのはわずか2石で、残余はすべて抜き取られている。東側の踏石は長さ121.0cm、踏面の幅27.0cmで、蹴上は約30cm。踏面の標高は94.28mである。西側の踏石は長さ45.0cmで、踏面の標高は94.30mである。

**地覆石抜取痕SX9385B** 基壇縁をほぼ完周する幅40cm程度の溝状遺構で、花崗岩の地覆石を抜き取った際の掘り込みである。埋土は近代盛土（茶褐色土）に類似し、花崗岩片・瓦片や木炭が多い。凝灰岩Bの地覆石抜取痕SX9385とはほぼ同位置にあり、かつ層位は上位である。

**基壇外装の変遷** 以上をまとめると、確認できる遺構に基づく基壇外装の変遷は次のとおりとなる。

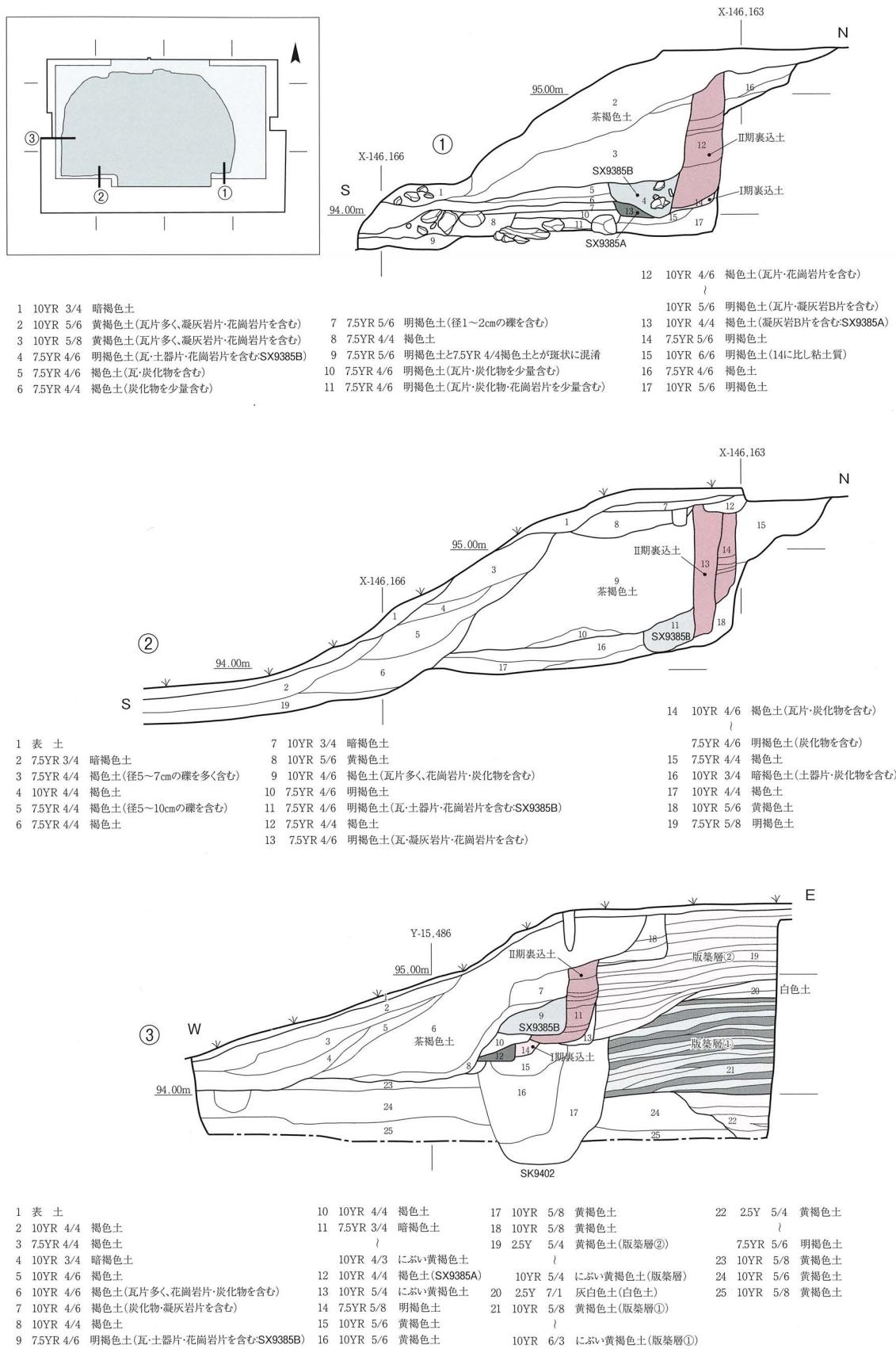
I 期 凝灰岩Bの地覆石SX9381・9382・9384・9392と、これらに伴う石組溝SD9387・SD9389の時期。地覆石は今回の調査で確認した最古のものである。地覆石の裏込土は橙褐色粘質土（I期裏込土）で、瓦片・土器片を含まず、木炭もごく少ない。南階段SX9405は積土内に多量の凝灰岩B片を



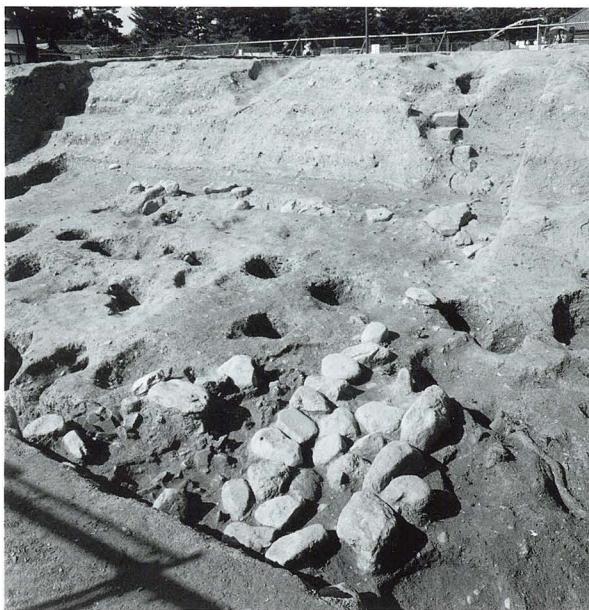
第18図 基壇東北隅（北東から）



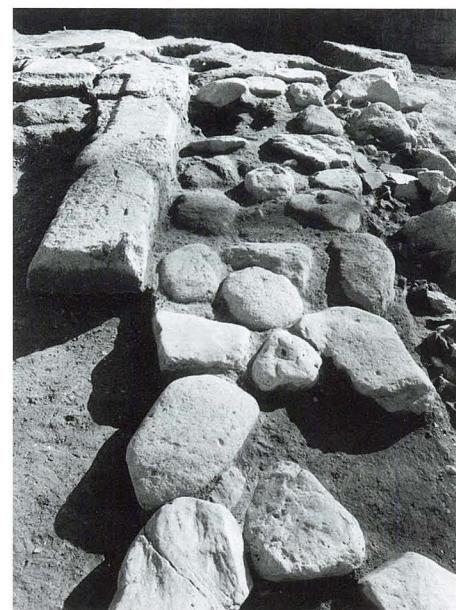
第19図 地覆石SX9381（北東から）



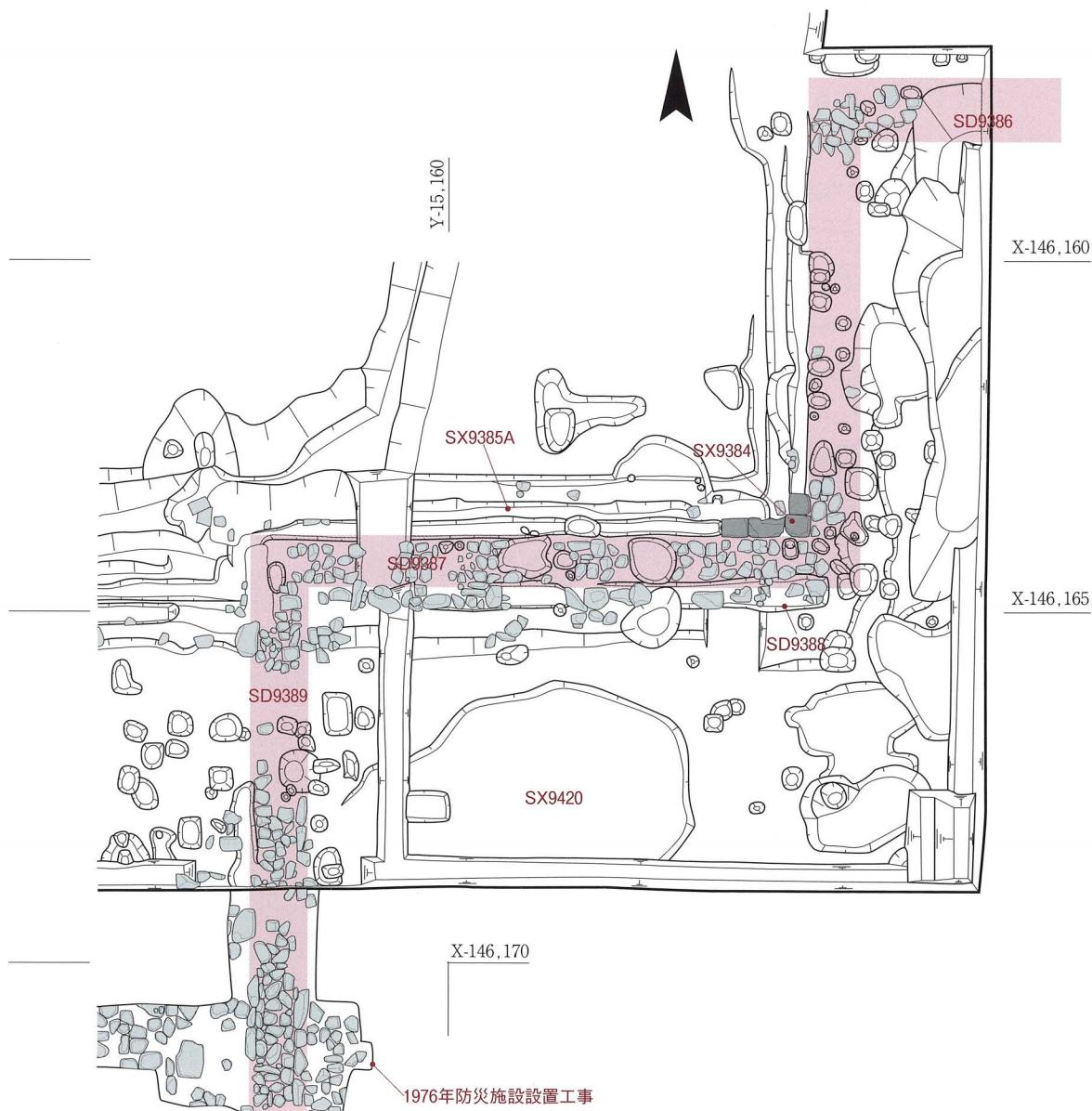
第20図 土層剖面図 (1 : 50)



第21図 石組溝SD9389（南から）



第22図 SX9384・SD9387（西から）



第23図 基壇南東部平面図（1：100）

含み、上掲の地覆石と同時期の築造とみられるが、大規模な改修を受けた形跡がなく、奈良時代まで遡る可能性がある。この場合、I期の上限は奈良創建時となろう。これに対し、創建時の中金堂では凝灰岩Aを基壇外装に用い、のちに凝灰岩Bに置き換えたことが判明している。南大門では凝灰岩Aの地覆石を確認できず、またその抜取痕跡も検出できなかったが、創建時の使用石材が凝灰岩Aであった可能性を否定できない。つまりI期の開始時期については、なお議論の余地がある。なお、地覆石据付土およびSX9405積土から採取した木炭の<sup>14</sup>C年代は8世紀初頭を示し、いずれの可能性をも否定しない。

**II 期** 花崗岩の基壇外装を用いる時期。花崗岩の地覆石はすべて撤去されているが、その裏込土が残存していた。II期裏込土は基壇東北部・東南部・南西部で確認した帶状の土層で、版築で築いた基壇の周囲をめぐり、I期裏込土を直接覆う。褐色土と暗褐色土との互層をなす部分もあり、木炭・瓦片が多い。II期開始の実年代は不明確だが、金剛力士像の台石が凝灰岩Bの転用材で、12世紀末（第4次再建）の設置とみられることから、このときを一応の上限としたい。ただし、これは凝灰岩B→花崗岩という単純な置き換えを考えた場合に限る。なお、II期裏込土に産した木炭の<sup>14</sup>C年代には、11世紀末～12世紀前半と15世紀後半があり、後者の年代は火災とは無関係な基壇の改修時期を示すようである。

**III 期** 花崗岩の基壇外装を撤去する時期。第7次焼失（1717）後にも壇正積基壇を描く資料（『大和名所図会』；18世紀末）があり、基壇の破壊は幕末以後と考えうことから、III期は明治期であろう。

#### (3) その他の遺構

**瓦廃棄土坑SK9426** 調査区西南隅で検出した不整形な瓦廃棄土坑。検出面は表土直下で、基盤の礫層まで掘り込む。深さは約80cm。土坑には平瓦・丸瓦が多く投棄され、埋土は赤褐色の焼土塊や木炭を多く含む。火災後の瓦廃棄にかかる土坑である。瓦の時期は奈良時代のものを中心に平安時代まであり、土坑は永承元年（1046）の第1次焼失時に掘削されたと考える。

**瓦だまりSX9420** 調査区東南部で検出した浅い瓦だまり（第23図）。南大門の東南方、南階段へと続く道路の東側にある。木炭・土器細片を含む灰褐色土⑤を除去した時点で検出した。調査区南壁の観察では、瓦層は厚さ約30cmで、多くの瓦が浅い窪地に堆積した状況をみせる。瓦は平瓦が多く、ところによりそれらが密集した部分もある。瓦は奈良時代のものが多く、平安時代のものを含む。埋土からは9世紀代の土器が出土している。

#### (4) 近代の削平と修築

調査の結果、南大門の基壇は土取りで大きく削られたのち、多量の盛土によって土壇へと修築されていたことが判明した。基壇は東北部～東南部にかけての部分と、西北部とが大規模な削平を受け、このため礎石イ1～ハ1は消滅している。また、礎石抜取穴ハ2およびハ6は土取りのため半分を残すのみである。基壇の土取りは礎石を抜き取って以後のこと、明治期の可能性が高い。

一方、土取り後に残った基壇の周囲には、瓦片や花崗岩の岩片をきわめて多く含む茶褐色の土を盛り、本来の基壇規模をやや上回る土壇を築いていることも明らかとなった。この盛土（茶褐色土）は削平で縮小した南大門の基壇を直接覆い、東北部および東南部でとくに土量が多かった。茶褐色土中からは大正9年発行の一銭銅貨が出土し、土壇の築成がそれ以降であることを教えている。なお、調査前に撤去した花崗岩の石敷は、この茶褐色土の上に敷かれたものである。したがって、その敷設時期は大正9年以降となろう。

（森川 実）

## 4 出土遺物

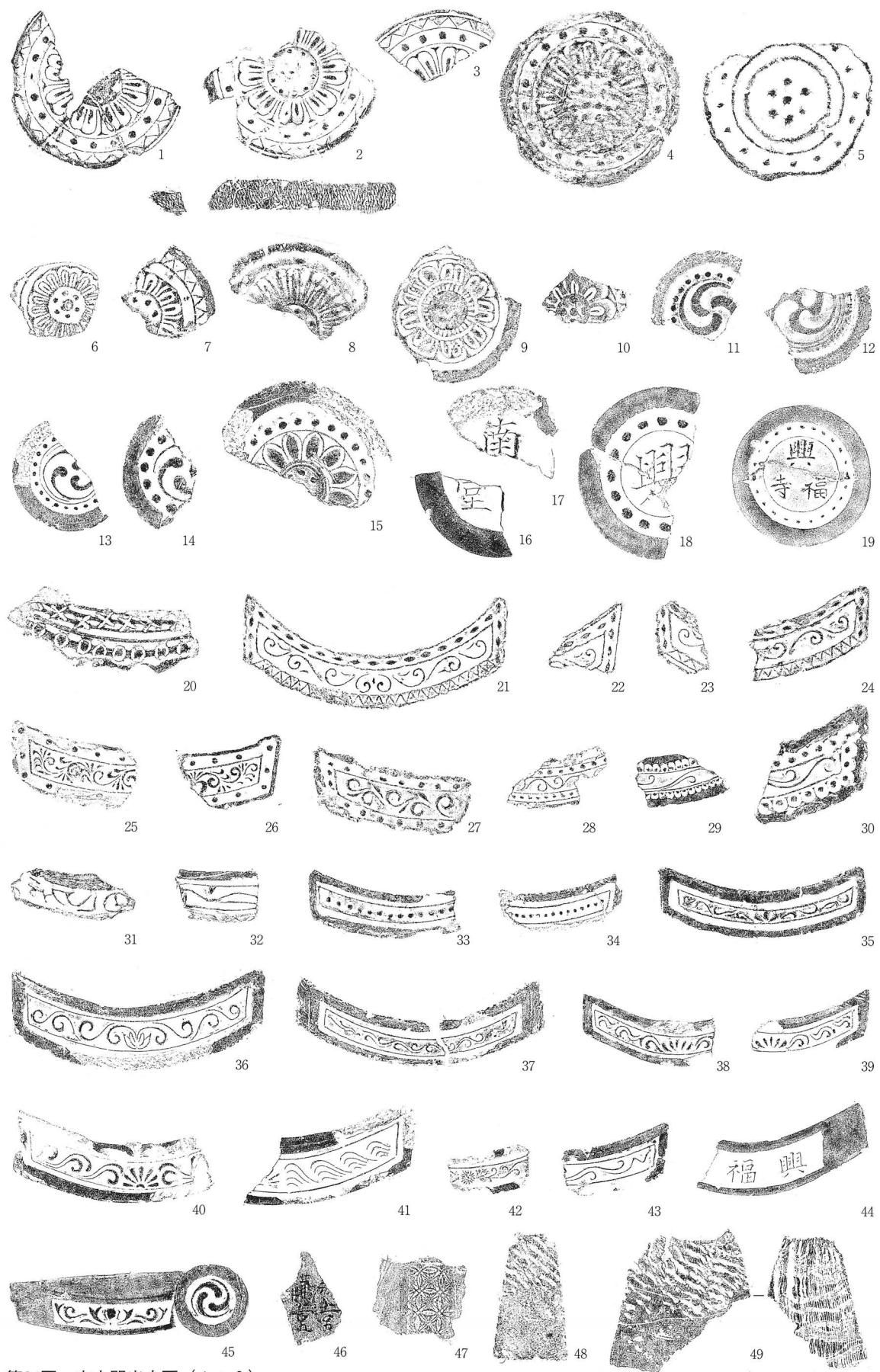
### (1) 瓦磚類

出土した瓦磚類は合計44,802点で、うち瓦は軒丸瓦256点、軒平瓦230点、丸瓦8,538点、平瓦35,418点、道具瓦247点からなる。軒瓦の数量を時代別にみると奈良時代42点、平安時代57点、中世164点、近世142点となる。なお、調査区東部から緑釉水波文磚小片が1点出土した。

**軒丸瓦（第24図－1～19）** 1～4は創建瓦の興福寺式6301Aである。このうち2は瓦当部下側面の残存部分全体に縄叩き痕があり珍しい。6301Aは計13点出土し、奈良時代の瓦では最多である。瓦当裏面の布目痕跡は4点、範端痕跡は3点において観察した。5・6は奈良時代中頃～後半の瓦で、5は範の損耗が顕著な東大寺式6235、6は6282Hである。7は平安時代前期、8～10は同後期の蓮華文軒丸瓦である。平安時代では後期の瓦が多く、永承の火災（1046）を皮切りに焼亡・再建が繰り返されたことを反映する。11・12は外区に多数の小型珠文を配した中世の三巴文軒丸瓦である。11は巴頭が尖り、12は巴頭が相互に接している点で古相を呈する。治承の兵火（1180）以後、嘉曆焼失（1327）以前の瓦であろう。13・14も珠文縁三巴文軒丸瓦だが、巴断面は半円形で巴頭は丸く仕上げられ尾部との区別が明瞭である。このうち13は珠文が小さく数が多い。圏線も明瞭である。室町時代後半に帰属しよう。他方、14は圏線もなく大きな珠文が少數巡る。焼成も非常に良好なので近世後半のものであろう。15は珠文縁単弁蓮華文軒丸瓦で、慶安年間の北円堂修理瓦ともいわれる。16・17はそれぞれ「堂」「南」銘をもつ。「南円堂」銘入り軒丸瓦で、享保火災（1717）後の南円堂再建期のものであろう。18は「興」、19は「興福寺」銘をもつ近世後半以降の珠文縁軒丸瓦である。

**軒平瓦（第24図－20～45）** 20は久米寺式6561Aで興福寺創建期を遡るものである。「○」印の間隔はやや広く、「×」印の配置が不規則である。21～24は6671で、21・22はA種、23はE種、24はL種である。6671A・Lは長い貼り付け段顎をもつ興福寺創建瓦である。両型式の多くはSK9420・SK9426より出土した。一方、23に掲げた6671Eは段顎が短い。ところで、養老4年（720）の「造興福寺仏殿司」設置により平城宮・京内に現れた長い段顎の6671Bが、長い段顎の6671Aからの影響で成立したなら、6671Aの段顎が短小化ないし消失するのは同年以後のこととなるため、短い段顎の6671Eの年代も同様に推定し得る（『平城宮発掘調査報告XIII』317頁）。したがって、23が南大門基壇版築土基底部黄褐色土中から出土したことは、創建年代を考える上で重要な意味をもつ。25・26は曲線顎をもつ珠文縁均整唐草文軒平瓦で、奈良時代後半～平安時代に帰属しよう。奈良時代とすれば新型式となる。27は平安時代の前期、28～30は平安時代後期の珠文縁均整唐草文軒平瓦である。文様の類似から、30は軒丸瓦10と組み、永承再建時の瓦とされている（『興福寺食堂発掘調査報告』）。31・32は植物文を配し、31は凸面瓦当付近に面のある曲線顎を、32は低い段顎をもち、やはり平安時代後期に比定できる。33・34は鎌倉時代の連珠文軒平瓦である。35～43は室町時代の軒平瓦である。35～37はいずれも唐草文を飾り、35は瓦当貼り付け技法、37は顎貼り付け技法をもつ。37は瓦当外区調整も明瞭で、室町時代でも後半に属しよう。38～41は中心半裁菊花文に波状文を有し、同じく室町時代後半の資料とみる。42・43は唐草文を有し、43は中心菊花文をもつ。44・45は江戸時代後半の資料で、享保焼失～廢仏毀釈までの所産であろう。

46・47は特殊叩き目（46は「講堂」の文字叩き）をもつ中世平瓦である。48・49はSK9426出土の特殊丸瓦で、凸面に螺旋状の叩き目を残し凹面に纖維痕が刻まれた特異な資料である。 （森先一貴）



第24図 南大門出土瓦 (1 : 6)

## (2) 土 器

興福寺南大門では、整理箱で14箱の土器・陶磁器が出土したが、半数は表土および茶褐色土（近代盛土）からの出土である。

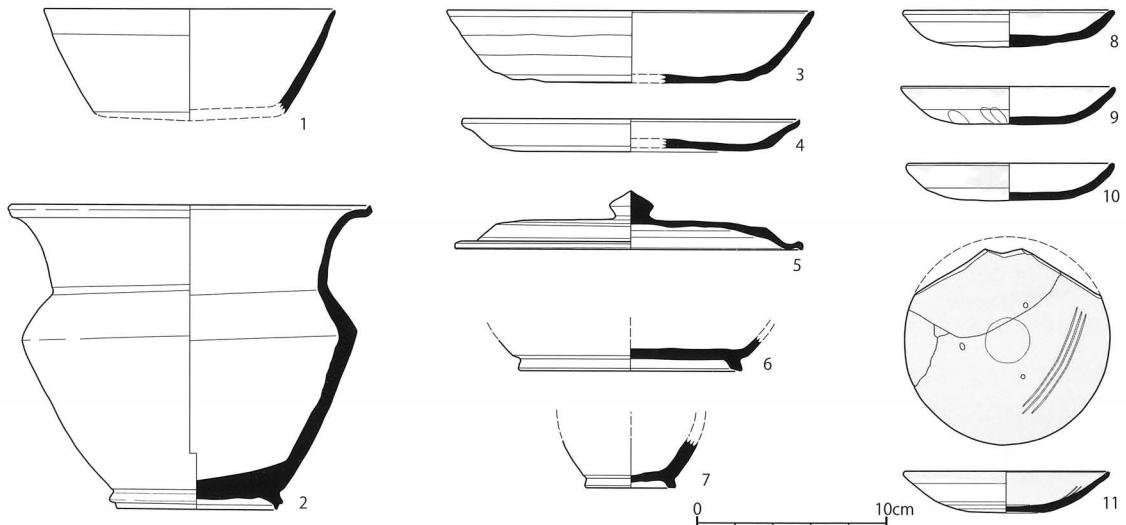
第25図1は、須恵器杯。基壇断面の西壁（標高93.2m）から抜き取ったもので、基壇築造直前の整地層②に含まれていた。口縁部をわずかにとどめるが、底部を欠いている。内面の底部近くと外面の一部に赤色の付着物があり、蛍光X線分析の結果水銀朱と判明した。奈良時代のもの。

2は、鎮壇具埋納遺構SX9361から出土した須恵器広口壺（壺Q）で、鎮壇具容器に用いたものである。口頸部は基部が太く、外彎して外上方に広がり、口縁端部は小さくつまみ上げている。口径と体部最大径とでは前者がやや大きい。体部上半に明瞭な稜線をもち、下半は回転ヘラケズリで整える。高台は外反し、端部が尖っている。奈良時代前半のものであろう。

第25図3～7は、SX9420の出土土器。SX9420は調査区東南部の瓦だまりで、多量の瓦とともに9世紀前半の土器が出土している。土師器は細片が多く保存状態がわるいが、杯A、椀A、皿A、皿C、盤、高杯、甕がある。全体にc手法のものが多いが、杯、皿、椀にはヨコナデで仕上げたものもある。黒色土器A類の破片には、杯A・杯Bの双方がある。須恵器は少数の杯Bとその蓋、壺M、鉢の破片があるのみである。3は土師器杯Aで、口縁部の上半をヨコナデで仕上げる。口縁部から底部にかけて黒斑をもつ。4は土師器皿Aで、やはり口縁部をヨコナデで整形している。5は、須恵器杯B蓋。平坦な頂部外面にロクロケズリの痕跡をとどめ、乳頭状のつまみを付す。6は須恵器杯Bの底部。7は須恵器壺Mの底部で、断面台形の高台を付している。

第25図8～11は、調査区東南部の灰褐色土から出土した近世の土師器皿と陶器皿である。これらは東南隅の地覆石SX9384のすぐ南側に埋没していたもので、4枚が重なって出土した。8～10は土師器皿で、同規格（口径11.0cm、器高2.0cm）のもの。いずれも口縁部内面に煤が付着し、灯明器に用いたことがわかる。11は内面と口縁端部に施釉した京－信楽系の陶器皿。内面見込みには目跡3箇所をとどめ、3本の平行する条線がある。底部外面はロクロケズリで整える。外面にはタール状の物質が付着しており、やはり灯明器である。

（森川 実）



第25図 南大門出土土器（1：4）

### (3) 金属製品・銭貨

**金属製品（第26図－1～7）** 金銅製品には紐金具、鶴形製品、銅製品には巡方、銅鉢、キセルなどがあり、鉄製品は、釘が60点と最も多く、この他に鎌などがある。

1は銅製巡方。平板形式の表金具である。内面の四隅に鉢足を鋲出し、外を斜めに面取りする。現寸法は横3.0cm、縦2.5cm、厚さ0.25cmで、透孔の寸法は横2.1cm、縦0.6cmである。表土より出土。

2は金銅製の飾金具で、環台と環からなる。環台は、表裏面ともに四隅が斜めに面取りされた切子形で、裏面に環座金具との接合痕跡が認められる。環は楕円形に作られ、その最大径は5.2cmである。中世に見られる手箱の紐金具、あるいは甲冑の総角付金物の一部と考えられる。

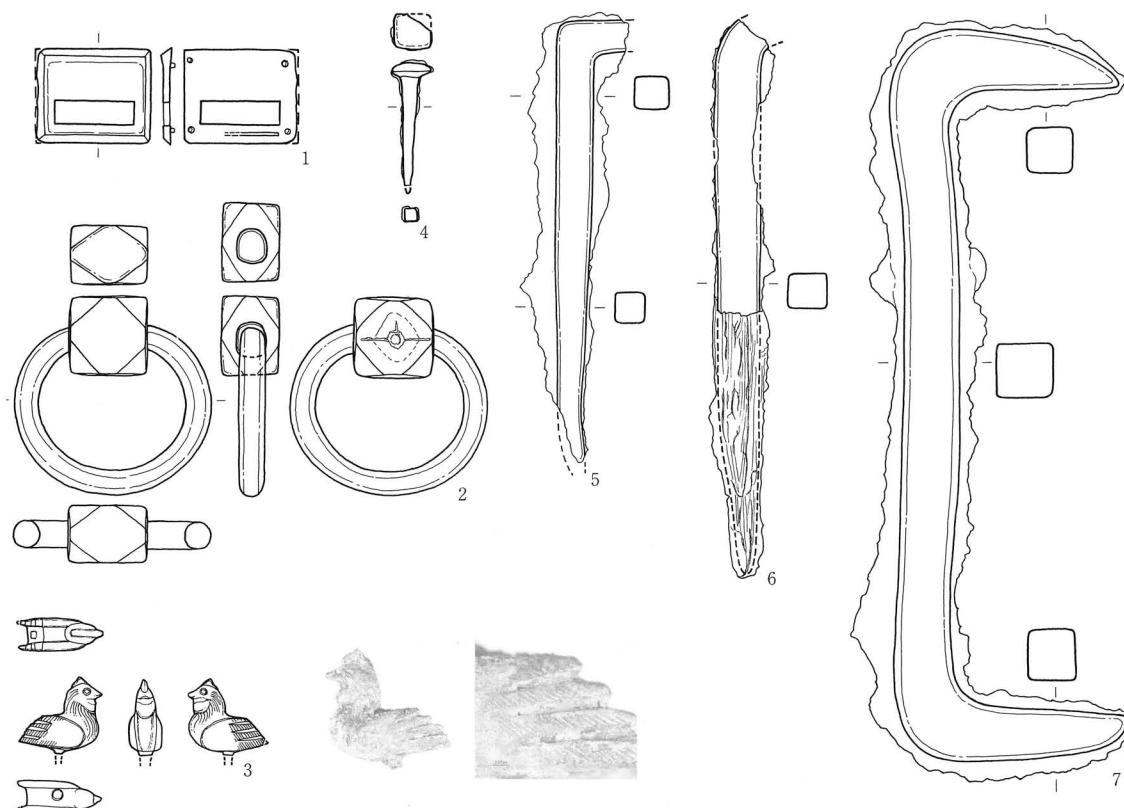
3は鶴形金銅製品。全体長、高さともに1.0cm。目や鶴冠、羽毛などが、毛彫りによって細かく表現されている。欠損しているが、底面には鉢足が鋲出されており、何らかの付属品と考えられる。基壇下、東南隅の灰褐色土より出土。

4は銅鉢。方頭である。頭部と先端部をわずかに欠損する。残存長3.2cm。

5・6は鉄製の折釘。このうち、頭部形状の判明するのは5のみで、軸部上端の厚さを減じず、直角近い角度で折り曲げている。6は頭部の大部分が欠損するが、屈曲部が認められ折釘と考えられる。下半部に木質が錆着する。両者とも基壇下灰褐色土出土。この他に円頭釘も出土している。

7は鉄製の鎌。脚部両端がほぼ直角に派生する。軸部断面形は正方形をなす。表土より出土。

**銭貨** 表土、茶褐色土、灰褐色土、土坑から89点の銭貨が出土した。銭種別にみると、寛永通宝が42点と最も多く、その他に文久永宝、二十銭、十銭、五銭銀貨、一銭、半銭銅貨などがある。基壇削平後の盛土と考えられる茶褐色土には、大正9年に発行された一銭銅貨が含まれる。  
（芝 康次郎）



第26図 出土金属製品（1：2、3のみ1：1）

#### (4) SX9361出土鎮壇具容器の内容物

**調査経過** SX9361から出土した須恵器広口壺は、出土位置や出土状況から発見時より鎮壇具容器と推測されていた。壺内には土が詰まった状態で、内部調査が必要であったことから、その状態を維持しつつ現場から研究所へ持ち帰った。内容物取り出しに先立って、X線透過撮影および高エネルギーX線CTスキャンによって、内部調査をおこなった。その結果、広口壺の底部に貼り付くように和同開珎5枚とガラス小玉13点が存在していることを確認した（第27図5・6）。それと同時に、壺内埋土の断面画像に3つに区分できる濃淡が見られ、それは土質などの違いを表しているものと予想された（同図5）。

これら内容物や埋土の情報を考慮して壺内を精査した。有機質遺物の出土も予想され、作業には慎重を期した。発掘過程において、断面画像で3つに区分できた埋土は、予想通り土質の違いと対応することが判明したため、上から1、2、3層と名称を付した。

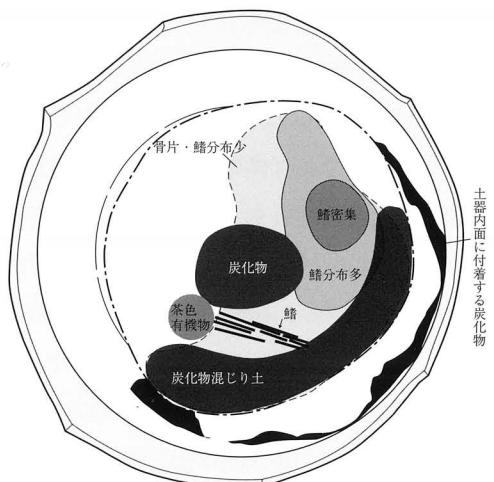
1層は非常に固くしまる黄褐色粘質土。層厚は最大8cm。2層は、1層とは対照的にしまりがほとんどない黄褐色細砂。層厚は最大で10cm。1、2層では遺物の出土は皆無であった。3層は炭化物、魚骨、植物質有機物、織物片などを大量に含む黄褐色細砂。それらは、広口壺底部から高さ5cmほどのところから出土しはじめ、銭貨上面まで続いた。3層はほぼ水平堆積だが、1層は土塊状の黄褐色土で、2層の砂質土は、1層と3層の間に陷入するように堆積していた。

**3層における遺物分布** 3層で確認された遺物（遺存体）は、炭化物、魚骨、植物質有機物（茶褐色、白色）、織物片、和同開珎、ガラス小玉である。これらはおよそこの順序で見つかり、平面分布にも差があった。炭化物集中は、上方では広口壺内面に沿い、下方ではほぼ全体に広がる。これとほぼ同じ場所に魚骨が分布する。一部で密集部を形成しており、中央部からやや東よりにかけて鱗が、下部では頭骨片が見られる（同図1）。魚骨の下層には茶褐色有機物が見え、その下層にある銭貨の上面を覆うように分布する（同図2）。茶褐色有機物と同レベルで、中央やや左寄りに白色有機物片が見られる。その下層に銭貨、ガラス小玉がある。銭貨上面には纖維状の有機物が付着し、さらに銅イオンによって緑化した1～2mmの織物片が数点ある（同図3）。ガラス小玉13点のうち、10点は銭の下方で孔を上に向かた状態だが、3点は、銭から離れて孔を横に向かた状態で分布する。広口壺底面には、白色の纖維状の痕跡が認められる（同図3・4）。

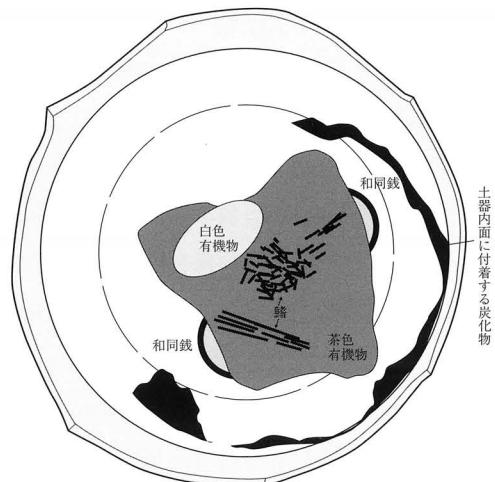
**鎮壇具の納入順序** まずガラス小玉と和同開珎が納められる。このとき、これらが織物に包まれたか、あるいは織物が上方に置かれたかという点はさらなる検討を要する。次に植物質のものが敷き詰められ、魚の頭部（後述の分析を参照）が納められる。内容物納入以降は、1層の土壤が基壇築成土に類似することから、一気に埋められたものと考えられる。広口壺内面に貼り付く炭化物は、この壺が南よりに若干傾いて埋められたことで、内容物全体が傾き、そのまま腐食して付着したものであろう。

**内容物** 和同開珎は、5枚のうち4枚が完形で、1枚は腐食によって3分2程度が残存する。このうち3枚が表向き、2枚が裏向きで銭文の表裏は一定していない。銭文は肉眼では判別しづらいが、X線透過撮影によると隸書体で（同図6）、いわゆる新和同である。ガラス小玉は13点あり、全て完形である。取り上げた3点について見ると、寸法は、最大径が5～6mm、口径が2～3mm、厚さが2.5～4mmで、大きさにやや幅をもつ。色調は風化によって白色～淡緑色を呈する。なお、銭貨とガラス小玉の取り上げは未完で、それ自体の分析は今後に委ねられる。

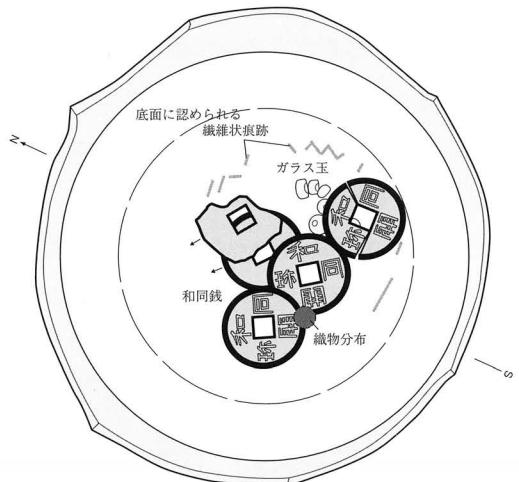
和同開珎とガラス小玉以外の内容物に関しては、後章の分析を参照されたい。 (芝 康次郎)



1. 3層上部有機物検出状況



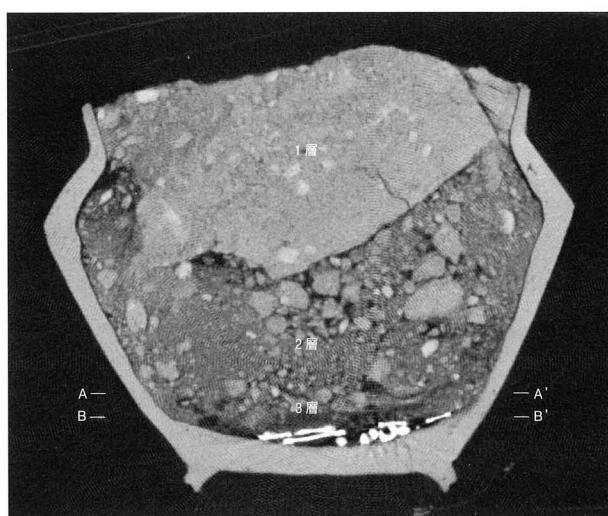
2. 3層中部有機物検出状況



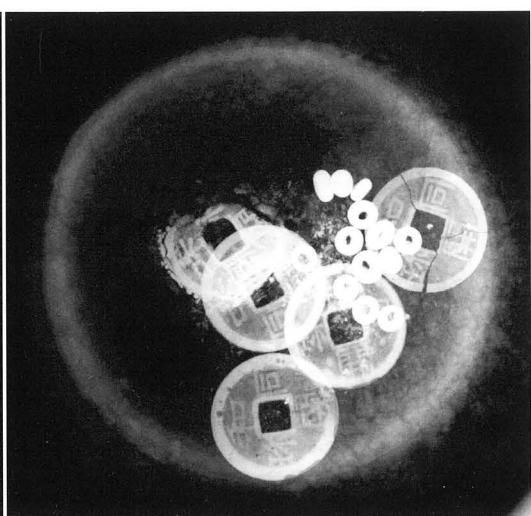
3. 3層下部和同錢・ガラス玉検出状況  
(壺内の矢印は銭文の向きを示す。)



4. 3層下部ガラス埋納状況 (X線透過撮影による)



5. C Tスキャン画像による断面図  
(A A' : 3層上部平面図実測レベル、B B' : 同中部平面図実測レベル)



6. X線透過写真による和同開珎とガラス玉

第27図 須恵器広口壺内の鎮壇具納入状況